学図 小国305

文部省検定済教科書
財団法人 教育図書研究会編修

教育學部 資料室

三年生の 国語 中

小KC G16

学校図書株式会社発行

60306
教科書文庫
6
810
34-1949
01304
49767.

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449767

三年生の国語　中

昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

広島大学図書
0130449767

廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

先生がたへ

(一)本書の編修方針

(1)編修にあたっては「学習指導要領」(国語科編)を基礎とし、更に、(イ)「検定基準」(ロ)カリキュラム構成及び国語教育に関する最新の研究、(ハ)望ましい教科書についての世論調査、(ニ)児童の言語生活の実態調査、(ホ)進歩した外国教科書の比較検討の結果などを参考としました。

(2)編修者によって選ばれた材料は、更にこれを実際に児童に実験し、また、教育学者、心理学者、言語学者、文学者、教育実際家などの意見を徴して、修正を重ね、完璧を期しました。

(二)本書の特色

(1)単元的構成　各単元は、児童生活の展開、国語科の特色、並びに地域性への適応を考慮して、周到に選ばれております。従って全国いずれの学校でも、児童の生活に即し、他教科と有機的関連をもった国語教育を、有効適切に行うことができます。

(2)「生きたことば」の指導　児童の日常生活における「生きたことば」を教材としてとりあげ、潑剌とした言語学習が系統的に営まれるように工夫してあります。従って、「読み」「書き(作り)」「聞き」「話す」力を一体的に養いながら、ことばそのものに対する関心と興味を次第に深めることができます。

(3)児童の興味の重視　児童の興味を重視して、明るく、楽しい読み物としての性格を具えていることも、本書の特色の一つであります。児童の経験を広め、感情を豊[illegible]ために、多方面の材料が準備されて[illegible]

(4)表現の吟味　表現は明確平易[illegible]に親しまれやすいように工夫しま[illegible]及び語彙の提出方法にも注意をはら[illegible]ージにおいて、新語並びに新出文字[illegible]く三つ以上に出ないように努めま[illegible]

(5)新しい生活態度の養成　それ[illegible]性を伸ばすとともに、広く社会人[illegible]同性を培い、民主的な生活態度を身[illegible]せるための材料が豊富に採られてお[illegible]

(6)補助材料の準備　本書をより有効に使用するために、教師用書、児童用ワーク・ブック、朗読レコードなどの補助材料の編修を企画しております。

広島大学図書
0130449767

もくろく

一　動物の話……四
お話の聞き方……四
とべないあひる……十

二　みのりの秋……十七
村の秋……十七
とりいれ……二十二
みなと……三十

三　こども会……四十四
手紙……四十四
ブレーメンの楽隊……四十八
けしごむ……五十九

四　火の話……七十四
ことばの表……九十五
かん字の表……九十六

動物の話

お話の聞き方

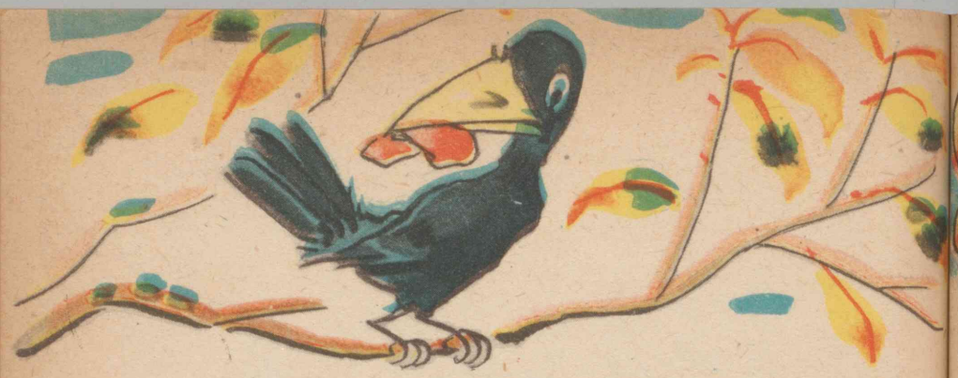
先生が、こういうお話をしてくださいました。

一わのからすが、木にとまっていました。下を見ると、肉があります。

「おや、肉が落ちてる。おいしそうだ。ひろってたべよう。」

そこへ、きつねがきて、

「いいにおいがする。あ、あの木の下に、肉



がある。たべてやろう。」

きつねが走りよると、からすはすばやく肉をくわえて木のえだにとびあがりました。

「もしもし、からすくん。その肉は、ぼくが先に見つけたんですよ。ぼくにわたしてください。」

からすはくびをふって、わたしません。

「それじゃあ、きみにも半分あげます。ふたりで半分ずつたべましょう。こちらへおりていらっしゃい。」

それでもからすは、くびをふって聞きいれ

ません。きつねは、ちょっと考えていました。そうしていいました。

「しかたがない。肉はきみにあげよう。そのかわり、きみのあのいい声で、うたをうたってくれないか。きみのうたを聞くと、ぼくらは、ほんとうにいい気持になるんでね。」

からすはとくいになって、

「カア。」

と鳴きました。

くわえていた肉は、ぱたっと地

面に落ちました。

「カア、カア、カア。」

きつねは肉をひろうと、すぐにげてしまいました。からすはそれに気がつきません。空の方を見あげながら、

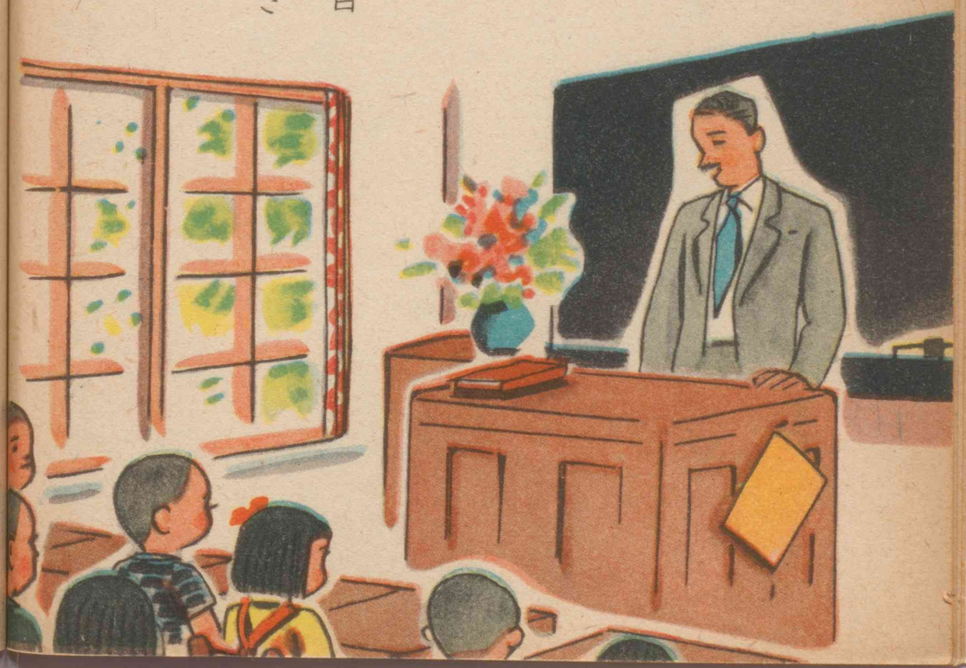
「カア、カア、カア。」

と、また、声をはりあげて鳴きました。

お話がすんでから、先生は、黒板につぎのようにお書きになりました。

一、ずるいからすの話
二、りこうなきつねの話
三、からすはいい声だという話
四、肉を半分ずつたべた話
五、からすときつねの話
六、ばかなからすの話

これをちょうめんにうつして、自分がいいと思うのにまるをつけなさい。



私は五がいいと思ったので、五にまるをつけました。二がいいという人もいました。六がいいという人もいました。一や三や四にまるをつけた人もいました。

先生は、

「もう一度、今のお話をします。自分のがあっているかどうか、どんなお話か、今度はよく考えながら、聞いてください。」

といって、もう一度、お話してくださいました。

とべないあひる

―ラジオで聞いたお話―

お庭の池から、あひるの親子があがって来ました。今およぎのおけいこがおわったところです。

よち、よち、よち、よち。

ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ。

おかあさんあひるのあとから、あひるの子が、おしりをふりふりあがって来ました。

「たいへんおじょうずになりましたね。」

おかあさんあひるは、ぶるんとからだをゆすって、はねについている水をふるい落していいました。

子どものあひるも、おかあさんのまねをして、小さなはねを、ぶるるんと動かしました。

「このつぎは、もぐり方を教えてあげましょうね。」

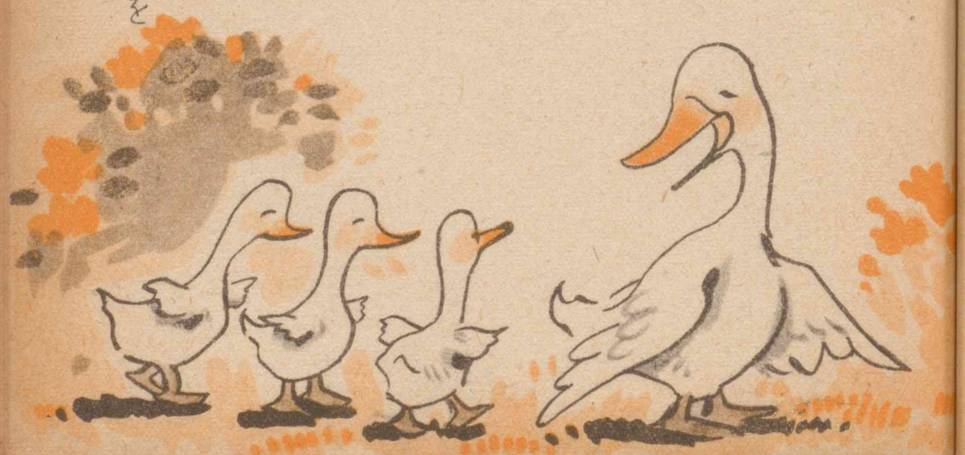
おかあさんあひるがやさしくいいました。

「うれしいな、このつぎはもぐり方だって。」

「うれしいな。」

「うれしいな。」

「ぼく、もぐれるようになったら、おさかなを



とってたべるんだ。
「ぼくもだ。」
「わたしもよ。」
あひるの子どもたちは、大よろこびでした。
「さあ、つかれたでしょう、おひるねのじかんですよ。」
おかあさんあひるがすわって、とろりと目をつむりますと、子どものあひるもすわって、目をつむりました。
ところが、あひるたちの上のかきの木に、すずめがたくさんいてさわぐのでねむれません。
「はねがあるのに、とべないあひる。」
「鳥のくせに、とべないあひる。」

すずめは、あひるの子に、そんないじわるをいっているのでした。
あひるの子どもは、くやしくてたまりません。おかあさんが、しかってくれればいいのにと思うけれども、おかあさんは、ちっとも気にかけず、とろりと目をつむっています。
「とべるさ、とんで見せようか。」
一わのあひるの子が、よちよちと、石だんの上にあがっていきました。あんまりくやしいので、す

ずめにとんで見せようというのです。
あひるの子は、石だんの上から、ぴょんととんでみました。けれども、あひるがとべるはずがありません。ころりところがり落ちて、地面に、いやというほど、からだをぶつけました。
「ぴよ、ぴよ。ぴよ、ぴよ。」
あひるの子は、鳴きながら、おかあさんあひるのところへいきました。おかあさんあひるは、びっくりして、「があ、があ、があ。」と、あひるの子のところへかけよりました。
すずめは、びっくりしてにげました。
「おかあさん、とび方も教えてください。」

あひるの子は、みんなでおねがいしました。けれども、おかあさんあひるは、
「だめ、だめ。あひるは、とべない鳥でいいんですよ。」
といって、てくてくと、お池の方へ歩きだしました。あひるの子たちも、よちよちとついていきました。
「さあ、こんどは、もぐり方ですよ。」
おかあさんあひるが、ちゃぽ、ちゃぽとお池にはいって、すいすいとおよぎはじめると、あひるの子たちも、じゃぶ、じゃぶとはいって、すいすいおよぎました。
「ね、ほら、すずめは、こんなにおよげないでしょう。」
おかあさんあひるが、そういうと、

「あ、そうだ。ぼくたちは、およぐ鳥なんですね。」
「だから、足だって、水かきがあるのね。」
あひるの子たちは、はじめて、自分たちのことがわかりました。
そして、おかあさんについて、もぐり方をけいこしながら、
「とべないけれども、およげるよ。」
「とべないけれども、およげるよ。」
とうたいながら、たのしくお池の中で遊びました。

みのりの秋

村の秋

—よびかけ—

一　雲

みのる「青い、青い空だよ。」
すすむ「ふかい、ふかい空だよ。」
よしお「すじ雲がうかんでいるよ。」
ゆたか「秋の雲だよ。」
ふみ子「そうよ、秋の雲よ。」

まさお「雲は、いつでも空から見ているよ。」
みのる「こがねのたんぼを見ているよ。」
すすむ「ぼくらの村を見ているよ。」
とし子「そうよ。雲は、きのうもきょうも、見ているよ。」

まさお「山のむこうの友だちよ。」
ふみ子「遠い町の友だちよ。」
みのる「くりがはじけているよ。」
すすむ「ふながつれるよ。」
よしお「雲にお聞きよ。」
とし子「雲は知っているよ。」

ゆたか「ぼくらのたのしい秋を知っているよ。」

二　風

ふみ子「すすきのほがゆれるよ。」
とし子「すずめおどしの紙きれが、
白く光るよ。」
かず子「かれ葉が、かさこそなるよ。」
やす子「風がふいているよ。」
れい子「秋の風よ。」
みのる「そうだよ、秋の風だよ。」

ふみ子「風は、なんでも知っているよ。」
かず子「きのこのにおいを知っているよ。」
やすよ「こおろぎの歌を知っているよ。」
すすむ「そうだよ。風はいつでも
みんなといっしょだよ。」

やすよ「山のむこうの友だちよ。」
みのる「遠い町の友だちよ。」
れい子「きくがさかりよ。」
ゆたか「かきが、まっかに色づいてるよ。」
とし子「もうじき、ほうねんまつりよ。」

かず子「ふえや、たいこの音を、
風がはこんでいくでしょうよ。」

みのる「風にお聞きよ。」
すすむ「秋風は知っているよ。」
れい子「わたしたちのうれしい秋を
知っているよ。」

とりいれ
(一) いねかり

いねのほが、きいろくなって、見わたすかぎり、波をうっています。

ザック、ザック。
ザック、ザック。

あっちでも、こっちでも、いねかりです。

ぼくは、ねえさんといっしょに、いねかりがまを持って、うちのたんぼにいきました。

かまを右手でしっかり持って、左手でいねをにぎって、ザ

ック、ザックとかっていきます。

重いほさきが、ばらばらとたれてくるので、ほさきをふって、きちんとそろえては、地面にほします。

ザック、ザック。
ザック、ザック。

「よく手もとを見て、けがをしないように。」

おかあさんが、おっしゃいました。

つかれるので、ときどき、こしをのばしては、かっていきます。

青いいなごが、ほからほにとびうつって、にげていくのがおもしろい。

ぼくは、おいかけるようにしてかります。

ザック、ザック。

ザック、ザック。

日が、かんかんとてって、あせが、たらたら流れます。

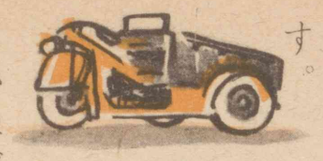
手を休めて、あせをふいていると、むこうのたんぼで、赤いうんどうぼうをふって、たろうくんが、「おういい。」とよびました。

ぼくも、持っていた手ぬぐいをふりまわして、「おういい。」と声をかえしました。

ザック、ザック。

ザック、ザック。

だれも休みません。ぼくも、元気を出して、かっていきます。



(二) いねはこび

いねがよくかわいたので、あすから、だっこくをします。

それで、きょうは、たんぼにほしておいたいねを、みんなうちのまわりにはこんで来ました。

おとうさんは、オート三輪車をかりて来ました。うんてん

をするのは、にいさんです。

ぼくたちは、さいしょ、それに乗って、たんぼにいきました。

しめった田からかりとったいねは、田のあぜにくいをうち、さおにかけてあります。かわいた田のは、かったのが、そのままほしてあります。

おとうさんは、それをたばにしていらっしゃいました。

ぼくたちは、きょうそうで、いねのたばを道ばたまではこんでいって、車

につみこみました。

山のようにつんでしまうと、にいさんが家まではこんでいきます。

こだかいところから見ると、リヤカーではこんでいる人もあります。家に近いところで、かたにかけて、すぐはこびこんでいる人もあります。

日がさしてあついので、あせがたらたら出ます。そこへ、葉の先や、もみのあたまがあたって、チクチクいたみます。

しかし、ぼくたちは、へいきです。どんどん、はこびつづけます。

「これで一ぱいだ。おまえたちも、この上に乗りなさい。」

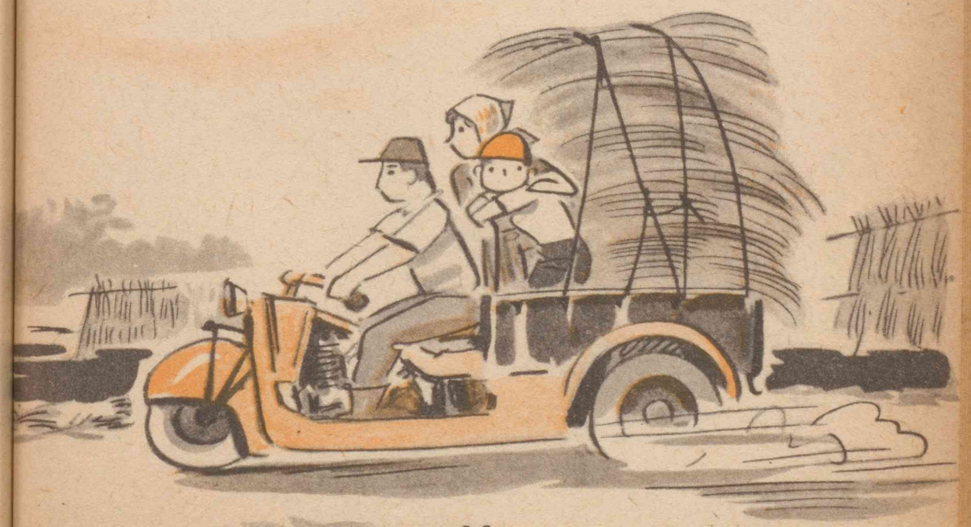
と、にいさんがいましたので、つみあげたいねの上に乗って、家まで帰りました。

風をきっていく時、ふと見ると、いなごが一ぴき、いねにつかまって乗っていました。

ねえさんが、手をのばすと、いなごは、ぴょんととんで、みぞの中に落ちました。

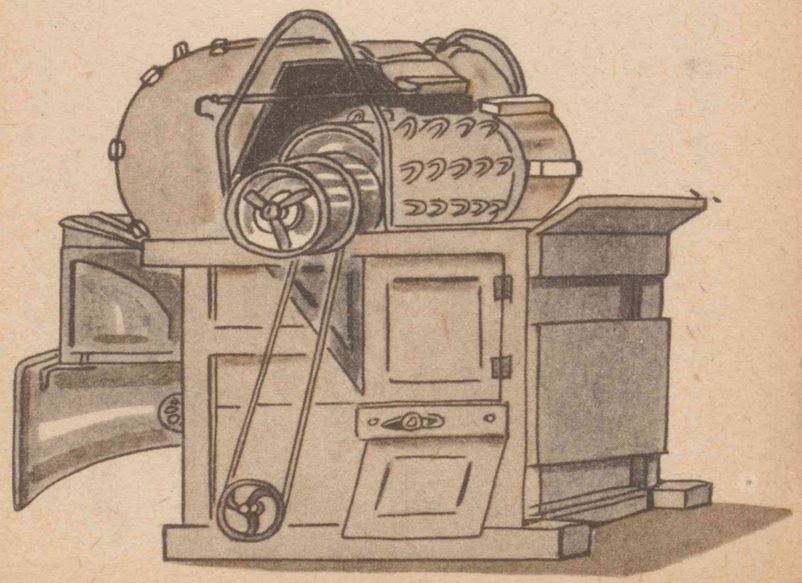
「かわいそうに。」

「自分の家が、わかるかしら。」



などといっているうちに、もう、いつの間にか、オート三輪車は、家の前についていました。

うらの庭につみあげられたいねは、やねまでとどくほどあります。



みなと

おととい、遠足でよこはまのみなとを見にいきました。

さくらぎちょうの駅まで、国てつ電車でいきました。

まどから、きもちのよい風がはいって来て、わたくしのかみの毛を、ふさふささせました。

さくらぎちょうの駅に着いて、広場にな

らびました。

「ばらばらになって歩かないように。」

と、先生がちゅういしてくださいました。

わたくしは、よこはまは、はじめて来ましたので、なんだか、たいへん遠いところに、旅をしているように思いました。

けんちょうの前に出ると、いちょうのなみ木がつづいていました。どの木も、美しく色づいていました。

わたくしたちは、そのなみ木道の下を通りました。黄色と、だいだいのクレヨンをまぜて書いたら、こんなきれいな木の葉の色が出るかもしれません。

そのへんは、道路がきれいで、大きな、白いたてものが立

ちならんでいました。ジープや自動車が、ひっきりなしに通っていました。

すこし左にまがっていくと、もうすぐはとばになっていて、しお風がふいて来ました。ここは、「メリケンはとば」といわれているところだそうです。大きな汽船が、いくそうも着いていました。あまり人が通っていないので、あたりはしずかでした。

今度は、電車に乗って「たかしまはとば」というところにいきました。

電車をおりて歩いていると、海の方から、

ときどき、ガソリンのにおいが流れて来ます。

正面のはとばをはさんで、東がわと西がわに、大きなかもつ船が、一そうずつ着いていました。

みんなは、船が近くに見えるので、「わあ、わあ。」といってよろこびました。

「大きいな。」とか、「船に乗ってみたいな。」とかいって、さわぎました。

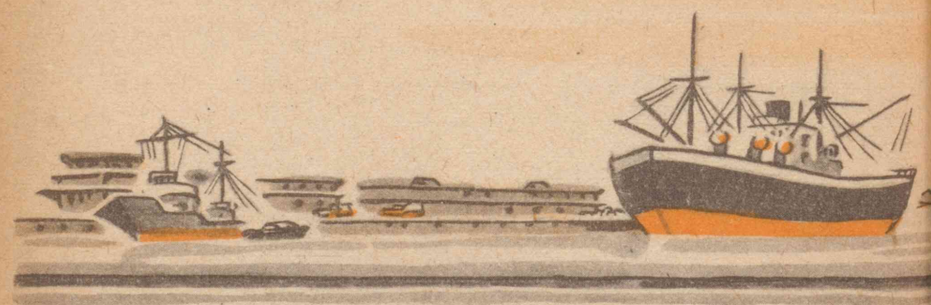
「先生、あの船、なにかつんでいるのですか。」

と、ふみ子さんがたずねますと、

「いや、つんでいるのではないよ。」

とおっしゃいました。

「じゃ、おろしているのですか。」
「そうだ。東がわにとまっている船は、ガソリンを運んで来て、ここでおろしているところさ。ほら、おきの方に、大きな船がとまっているのが見えるだろう。あの船からガソリンをうけとって、ここまで運んで来るのだよ。」
「ドラムかんに入れたのを運ぶのですか。」
「ちがう。あの船は、底が、ガソリンタンクになっていて、そこにいっぱいためることができるようになっている。」
「もし、火でもついたら、たいへんですね。」
「だから、『とりあつかいにちゅういするように』という旗が立っているだろう。」
「どの旗ですか。」
「あの赤い旗がそうだ。」
みんなは、いったんわかれて、す



きなところへ、いってみることになりました。
わたくしは、西がわにとまっている大きな船に近いところにいってみました。
船の中で、クレーンをまきあげる音がひびいています。
「先生、この船も、やはりガソリンをおろしているのですか。」
とたずねますと、
「これはちがう。しょくりょうとか、日用品などをおろしているらしい。」
と、教えてくださいました。
船のへさきのところに、ローマ字のような文字が書いてありました。

「あれは、ローマ字ではない。英語だよ。この船の名まえさ。『エレーザー・ロード』と書いてあるね。」
黒い色にぬってありますが、水ぎわのところが、まっかになっていました。そこに青い海の波が、だぶん、だぶんとうちよせています。
「この船、大きいな。」
「強そうに見えるな。」
みんなもよって来て、エレーザー・ロードを見あげました。
「どのくらい大きいと思いますか。」

先生が、こうお聞きになりました。みんなは、こまってしまいました。

「船は、なんといって、その大きさをはかるか、知っている人はありませんか」。

これもわかりませんでした。

「船は、『トン』ということばで、はかるのです。」

「すると、このエレーザー・ロードはなんトンあるのですか。」

と、わたくしが先生に聞きました。

先生は、ちょっとお考えになって、

「そうですね。八千トンぐらいでしょう。」

とおっしゃいました。

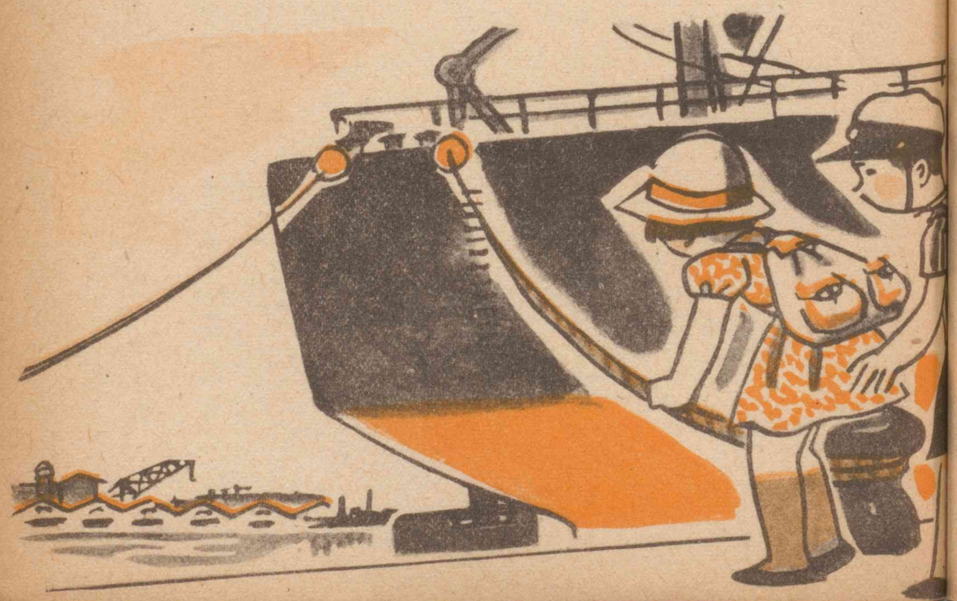
すこし歩いていくと、足もとに、太いあさのつながむすんであるのに、気がつきました。

そのつなは、エレーザー・ロードのいかりのあなから、ずっとつながって、このはとばのくいに、むすびつけてあるのでした。

いちろうさんが、

「太いね。」

といいながら、しゃがんでつかみました。



両手でにぎっても、にぎりきれないほど、太いつなでした。わたくしもにぎってみました。まるで、てつであんだように、かたいつなでした。

このつなを見ていると、二年生の時ならったお話を思い出しました。

はとばにすんでいた一ぴきのねずみが、月夜のばん、はとばをさんぽするのです。そうして、船からはとばにむすんであるつなを見つけるのです。

ねずみは、そのつなの上を、ちょろちょろと、わたっていくというお話でした。

ねずみではありませんが、わたくしも、このつなをわたって

みたくなりました。

南の方に、こんもりとしたおかが見えます。そこに、しんごうの旗が、四まいほど、風になびいていました。

「山下町のおかだ。あのしんごう旗を見て、船がみなとにはいったり、出ていったりするのだよ。」

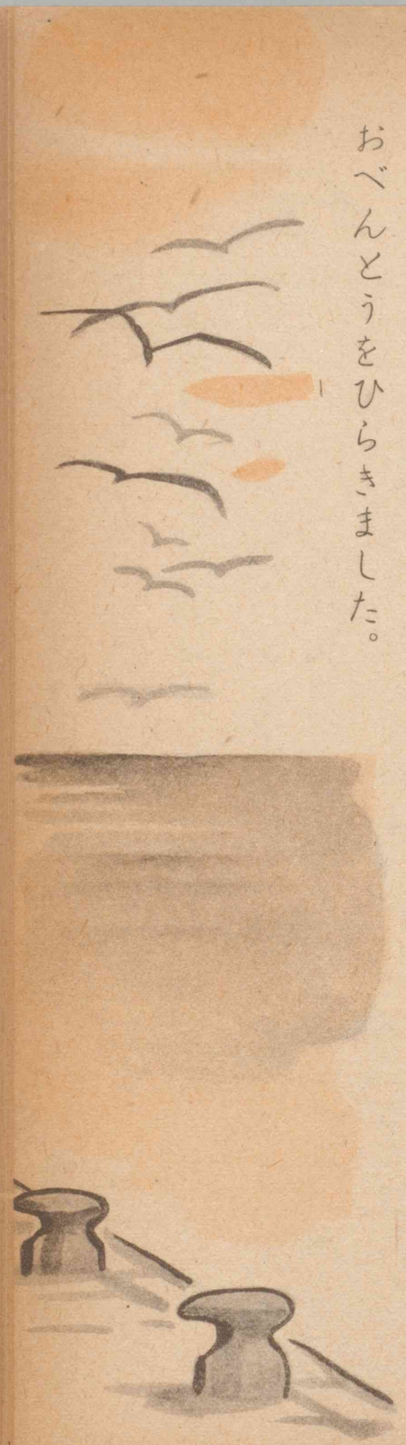
先生が、こんなせつめいをしていらっしゃると、としおさんが大きな声で、

「『なむのこばた』と書いてあるよ。なんのことだろう。」

といいました。

みんなが、
「どこに書いてあるの、そんなこと。」
と聞くと、としおさんは、すぐよこにある大きなそうこの入口をゆびさしました。
みんな、それを見て、大わらいをしたのです。
「たばこのむな」とひらがなで書いてあったのを、ぎゃくに読んだことがわかったからです。
それから、わたくしは、そばにあったまるたの上にこしかけて休みました。
うちに帰ったら、クレヨンで、ずがを書こうと思いました。
いちょうなみ木と、たかしまはとばと、太いつなと、三ま

い書こうと思いました。
一わのはとが、どこからかとんで来て、ついと、わたくしの前におりました。そうして、ぴょいぴょいと歩いては、何かひろってたべました。
「さ、もうおひるになるから、ここでおべんとうにしよう。それから、町を歩いて帰ろうね。」
先生が、こうおっしゃったので、みんなは、うれしそうに、おべんとうをひらきました。



こども会

手紙

十一月十五日(土曜日)の午後一時から、私たちの教室で、こども会をひらくことになりました。

こんどのこども会には、おとうさんや、おかあさんにもおいでをねがって、みんなでたのしい午後をすごしたいと思います。どうぞ、その日には、できるだけごつごうをつけて、おいでください。

プログラムは、このお手紙といっしょに入れておきました。紙しばいや、げきや、げんとうなど、

いろいろおもしろそうなものがあるので、私たちもたのしみにしています。

出演する人はもちろんですが、そのほかのものも、いろいろなかかりになって、いっしょうけんめい、じゅんびをしています。

げんとうの時に使うあんまくが、学校にないので、かかりの秋山さんは、「これでは、げんとうはやれないかもしれない。紙しばいに作りかえようか。」といっていましたが、ちょうど、まつもとさんのおとうさんの工場にしまってあるのがあって、それをかしていただくことになりました。

きょう、まつもとさんが、そのあんまくを学校に持って来

たので、教室のまどのところにはりまわしてみました。すると、明るい教室が、急にまっくらになってしまいました。秋山さんが、くらやみの中で、大きな声で、「ばんざあい。」とさけんだので、みんな大わらいをしました。

私たちは、こんなにして、こども会のじゅんびをしています。

どうぞ、その日には、みなさん、おそろいで、おいでください。お待ちしております。

十一月十日

三年一組の

おうちの方へ

三年一組一同

こども会プログラム

十一月十五日午後一時

三年一組教室

一、はじめのあいさつ……木村

二、せいしょうと、りんしょう……中島、ほか九名

「のぎく」「いっきゅうさん」「ぼんぼんどけい」

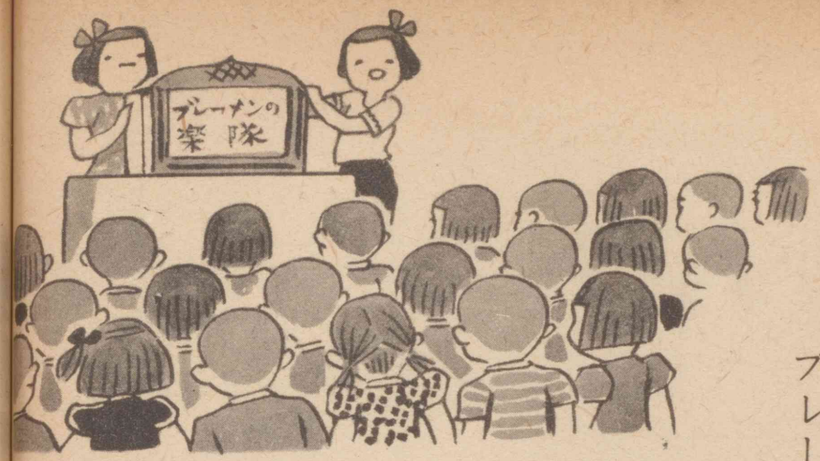
三、二十のとびら……山田、ほか四名

四、紙しばい「ブレーメンの楽隊」……小川、ほか二名

五、げき「けしごむ」……大野、ほか九名

六、げんとう「ジャックとまめの木」……秋山、林

七、おわりのあいさつ……小川



ブレーメンの楽隊

―紙しばい―

ふみ子さんは、この間　学校のとしょ室で、童話の本を読んでいました。

すると、その本の中に、「ブレーメンの楽隊」という、たいへんおもしろいお話がありました。

そのお話を、紙しばいに作ろうと思いました。お友だちのとし子さんや、やすえさんにも手つだってもらって、りっぱにできあがりました。

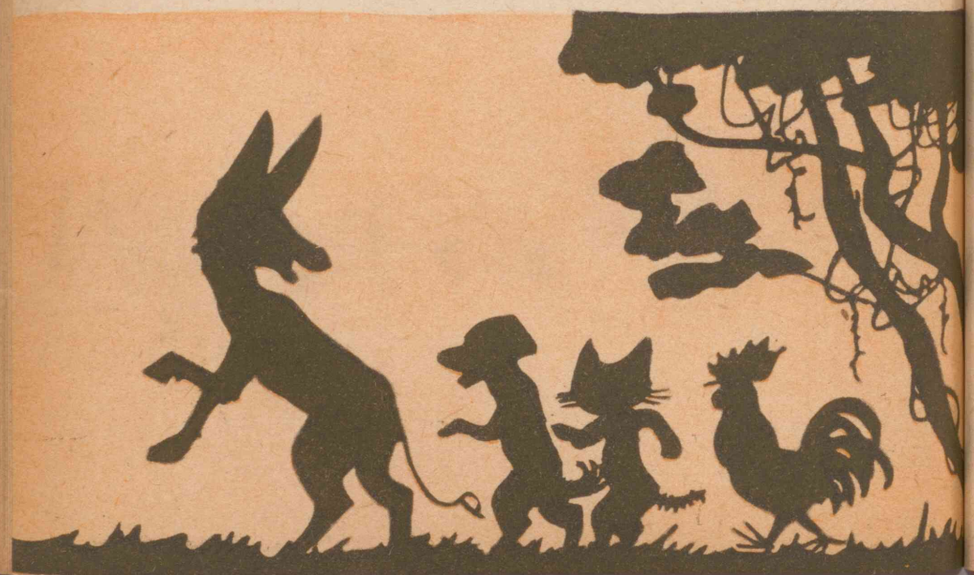
きょうは、みんなに、それを見せているところです。

(一)

ろばと、いぬと、ねこと、にわとりが、なかよく歩いていきます。

林の中を通りぬけ、ひろい野原をよこぎって歩いていきます。

いったい、どこへいこうというのでしょうか。



みんなは、これから、ブレーメンの町へいって、町の楽隊にやとってもらうつもりなのです。

ろばはギターをひき、いぬはたいこをたたき、ねこはふえをふき、にわとりは歌をうたって、それで町の人々を楽しませようというわけです。

（二）

夕方、ある森へ来たので、四ひきのなかまは、そこで夜を明かすことにしました。

ろばといぬとは、大きな木の下にねました。ねことおんどりとは、えだのしげった中へはいりこみました。おんどりは、

ねる前に、もう一度、四方八方を見まわしました。

すると、遠くの方に、豆のようなあかりが見えました。

それで、なかまに声をかけて、

「あそこに家があるにちがいない。あかりが見える。」

といいました。

そこで、みんなは、あかりの見えた方へむかって、出かけました。

とうとう、いっけんの家の前まで来ました。

(三)

「ろばさん、何が見える。」

「見えるとも、見えるとも、ごちそうのっているテーブルが見える。たべものも、のみものも、みごとなものだ。どろぼうたちが、それをおいしそうにたべているよ。」

「私たちもほしいものだね。」

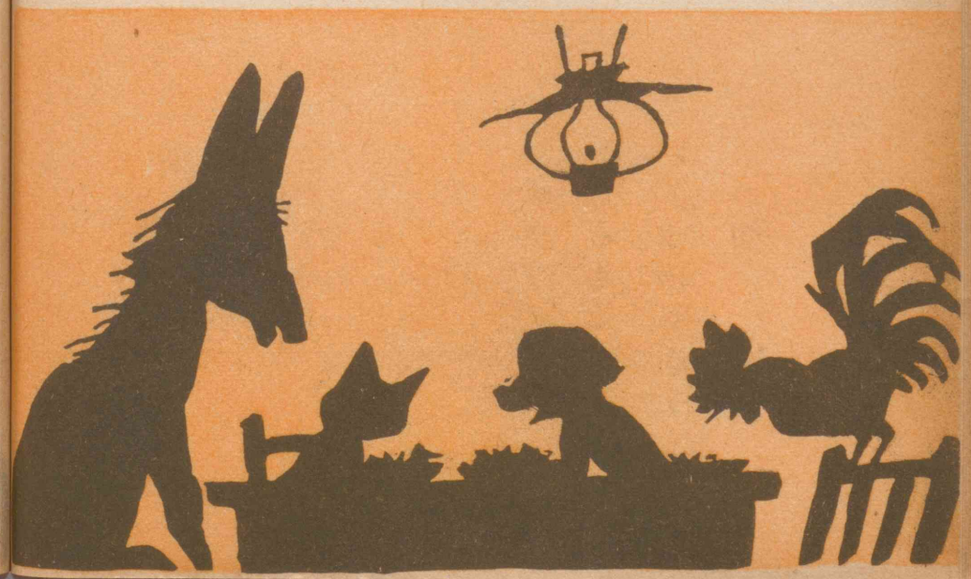
「どろぼうをおいだすくふうはないかなあ。」

(四)

ろばは前足をまどにかけました。いぬはろばのせなかにとびのりました。ねこはいぬの上によじのぼりました。さいごにおんどりがとびあがって、ねこの頭の上にとまりました。みんな、あいずにしたがって、いちどきに音楽をやりはじめました。ろばはさけび、いぬはほえ、ねこは鳴き、おんどりはときをつくりました。それから、みんなは、どっとへやの中へとびこみました。

（五）

どろぼうたちは、このおそろしいさけび声を聞いて、とびあがりました。そして、ばけものがはいって来たにちがいないと思って、森の中へにげこんでしまいました。そこで、四ひきのなかまは、テーブルに着きました。そして、どろぼうが残していったごちそうを、おなかいっぱいたべました。



（六）

夜中に、どろぼうのかしらは、手下を一人やって、家のようすをしらべさせました。どろぼうは、家の中がまっくらなので、だいどころへいって、あかりをつけようとしました。そして、くらいところで光っているねこの目を、火のついている炭だと思ったものですから、火をつけるつもりで、それにマッチをおしつけました。ねこはびっくりして、どろぼうの顔にとびついて、「にぁーっ」といって、ひっかきました。

（七）

どろぼうはひどくおどろいて、うら口から外へとび出そうとしました。すると、そこにねころんでいたいぬが、いきなりとび起きて、足にかみつきました。それから、庭を通って、こやしをつみあげたところをかけていくと、ろばが、あと足で、いやというほどけとばしました。おんどりは、このさわぎで目をさまして、はりの上から、「こけこっこー」と、どなりました。

どろぼうは、いっしょうけんめい、にげ帰りました。

（八）

「あの家の中には、おそろしいばけものがいて、私にいきをふきかけ、長いつめで私の顔をひっかきました。戸の前には、小刀を持った男が立っていて、私の足をつきさしました。庭には まっ黒な、ばけものがいて、こんぼうで私をなぐりつけました。それからまた、やねの上には、さいばんかんがいて、『わるものをつれてこい。』とどなりました。いや、もう、私はやっとのことでにげてまいりました。」

(九)

それからというものは、どろぼうたちは、二度とその家にやって来ませんでした。

四ひきのなかまは、この家が、たいへん気にいったので、もうそこを動こうとはしませんでした。

そして、みんなは、今でもまだ、そこにすんでいるという話です。

けしごむ

出てくる人

男……たけし、くにひこ、つねお、ひであき、はじめ、まこと

女……かず子、とし子、やす子、きみえ

ところ　おかの上

まくあく。

みんな正面（けんぶつの方）をむいてこしをおろし、写生をしている。

——晴れた日の午後である。
どこかで小鳥が鳴いている。
たけし（立ちあがって、大きな声で）「さあ、できた。」
——みんな、たけしの方を見る。
たけし（両手で、絵を見せる。まつの木が一本、はっきり見える）「どうだ、いいだろう。」
つねお「なあんだ。まつの木だけ

じゃないか。」
たけし「よく見ろよ。雲や鳥も書いてあるから。」
はじめ（のぞきこんで）「それ、へんなすずめだね。」
たけし「すずめ。ちがうよ、とんびだよ。」
くにひこ「とんびなんか、どこにもとんでいないじゃないか。」
たけし「見たんだよ、きのう。」
ひであき「へえ。じゃあ、それ、きのうの写生だね。」
とし子「きのうの写生なんて、そんなものあって。」
はじめ「あわてもののたけしちゃんにだけあるのさ。」
——みんな声をたててわらう。そしてまた、写生にかかる。
たけし（絵を近づけたり、はなしたりして見ながら）「きのうの

写生だってあるさ。……でも、へんかな。うまく書けたんだけど……。」

はじめ「うまいもんか。すずめみたいなとんびなんて、いやしないよ。」

たけし「じゃあ、きみのを見せろ。」

はじめ「ぼくはとんびなんか、書いてないよ。」

たけし（はじめの絵をのぞきこむ）「うまいな、はじめちゃん。」

はじめ（てれて……）「そうでもないよ。」

たけし「でも、ぼくよりうまいや。」

——たけし、みんなの書いたものを見て歩く。そのたびに、じぶんの絵と見くらべる。みんなの絵を見てしまうと、ま

た、前のところに帰って来る。

たけし（首をひねりながら）「どうもこのとんびはまずいな。やっぱり、きのうの写生はだめだ。」

——たけし、けしごむをさがしはじめる。見つからないので、ひとりでおおさわぎする。

くにひこ「どうしたんだい。」

たけし「たいへんだ。けしごむがない。はじめちゃん、きみ知らないか。」

はじめ「知らないよ。」

たけし「へんだな。ひであきちゃん、きみ見なかった。」

ひであき「さっき、使ってたじゃないか。」

たけし「だれかに、かしたと思うんだけどな。」
まこと「ぼく、かりたけど、返したよ。」
たけし「そうかい。でも、へんだよ。……ね、みんなさがしておくれよ。」
かず子「もっとよく、じぶんでさがしてごらんなさいよ。」
たけし「さがしたってないんだ。」
——たけし、おこった顔つき

で、はじめのかばんをめくったり、とし子のふで入れをあけてみたりする。
とし子「あら、わたし、けしごむなんかかりないわ。」
たけし「かりなくたって、まちがってはいっているかもわからないじゃないか。」
まこと「たけしちゃん、さっき、みんなの絵を見て歩いた時、どっかでなくしたんじゃない。」
たけし「そんなことはない。(ぷんぷんして)いちばんあとで使ったのはきみだろう。よくさがしてくれよ。」
まこと「だって、ぼくは返したといっているじゃないか。」
たけし「それがないからいっているんだ。」

まこと「なくったって、ぼくは知らないよ」。
たけし「知らないはずはないよ。きみだよ、きっときみだよ」。
まこと（だまって、たけしの顔を見ている）
——遠くで、かねが鳴る。
やす子「あら、中学校のかねよ、あと十分……」。
——まこと、絵を書きはじめる。
たけし「なんだ、なくしたくせに知らない顔して……」。
——まこと、とつぜん立ちあがって、たけしをつきとばす。
たけし、おきあがって、まことにむしゃぶりつく。みんなおどろいて立ちあがり、二人をわける。
まこと「もういっぺんいってみろ」。

はじめ（まことの手をおさえて）
「よせよ、まことちゃん」。
きみえ「いけないわ、らんぼうしちゃ」。
まこと「だって……」。
くにひこ（たけしをおしとめながら）
「いいったら。まことちゃん、よせよ。たけしちゃん、すわれよ」。
やす子「たけしさん。わたしのけしごむ、使ったらいいわ」。

とし子「わたしのだってあってよ。けんかはよしましょうよ。」
——まこと、もとのところへ帰って、がようしをひざにのせる。
ひであき（たけしに）「すわれよ。早く書かなきゃ、時間がなくなるよ。」
はじめ「そうだ。たけしちゃん。とし子ちゃんに、けしごむかりて、書きたまえ。ね……。」（と、たけしをすわらせる）
——やす子、じぶんのところに帰ろうとして、けしごむを見つける。
やす子「あら、たけしさん。これじゃない。」（と、手にのせて見せる）

たけし（それをうけとって）「うん……。」
はじめ「なあんだ。あったんじゃないか。」
きみえ「よかったわね。」
やす子「草のかげだったから、見つからなかったのよ。きっと。」
とし子（がようしをひざにのせながら……）「外に写生に出ると、よくクレヨンや、ごむけしをなくするわ。」
やす子「あら、ごむけしでなくて、けしごむよ。」
とし子「そうかしら。わたし、いつもごむけしっていうわ。『けしごむ』『ごむけし』……なんだか、どちらがほんとうか、わからないわ。」
くにひこ「書いたものをけすごむだから、けしごむさ。」

とし子「でも、ごむでけすから、ごむけしじゃない。」
はじめ「けしごむだよ。ねえ、たけしちゃん。」
たけし（けしごむをさし出して）「これには、『けしごむ』って書いてあるよ。」
はじめ（うけとって）「そうだろう。やっぱりけしごむだよ。これに書いてあるから、まちがいはない。」
つねお「そのけしごむ、ちょっとかしてくれない。でんちゅうがまがっちゃった……。たけしちゃん、かりていい。」
たけし「いいよ。」
まこと（すわったまま……）「たけしちゃん……。」
たけし「なんだ。」

とし子「もう、およしなさいよ。」
まこと「けんかじゃないよ。……たけしちゃんごめんね。あんなことして……。でもけしごむは、ぼくが持っていたんじゃないよ。」
たけし「うん。あれ、ひょっとしたら、ぼくがポケットに入れておいたのかもわからない。だから、ころんだひょうしに落ちたんだろう。ぼくはあわてものだから……。」
とし子「あの時、すぐわたしたちのをかしてあげればよかったのよ。」
かず子「そうね。みんなが知らない顔をしていたから、なおおこったのでしょう。」

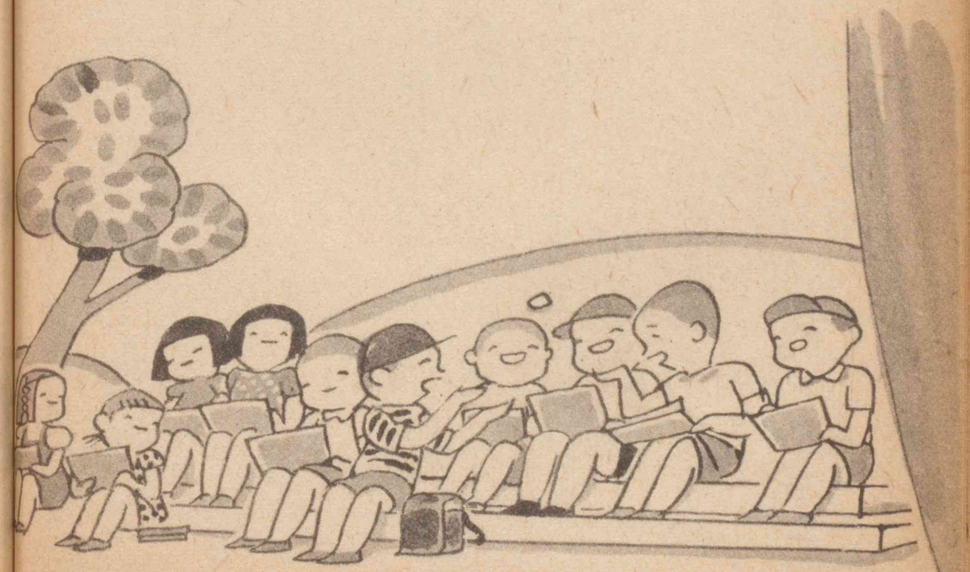
たけし「ぼく、へんなことといったからいけないんだよ。」

まこと「でも、らんぼうしたのはぼくだから……。」

くにひこ「だからあいこだよ。さあ、たけしちゃん、早くとんびの書きなおしをしなくちゃ……。」

たけし「そうだ、そうだ。けしごむ、けしごむ。」(とさけぶ)

つねお「なげるよ。」(と、たけしの



ほうへけしごむをなげる)

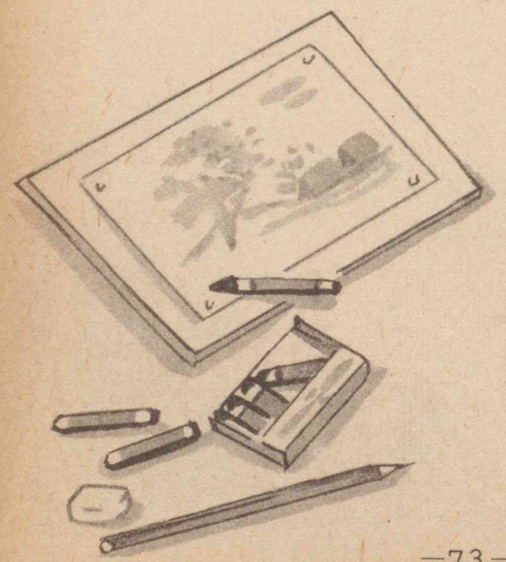
たけし(うまくうけとって)「えーと、このとんび、すずめにするかな。」

はじめ「そのままでも、すずめに見えるよ。」

——みんなわらう。たけし、頭をかいてけしはじめる。みんなも、えを書きはじめる。

——小鳥が鳴く。

——まくがしずかにしまる。



火の話
(一)

おおむかしは、人間も、けものと同じように、ほらあなの中にすんでいました。そして、はだかでくらしていました。

夏の間は、はだかでいても、べつにこまりはしないでしょう。けれども、冬が来るというのに、はだかでいることは、らくなことではありませんでした。そのうえ、おおむかしの人は、火というものを持っていなかったのです。

その火を取って来たという、むかし話をしましょう。

「ああ、寒い。火がほしいなあ。」

冬のある日、ほらあなの中で、おとうさんがつぶやきました。ほらあなの中にはおとうさんと、そのむすことがすんでいました。

「おとうさん。ぼくが火の山にいって、取って来ましょうか。」

「おまえなんかに、取れるものか。人間どもに取れるものなら、とっくのむかしに、だれか取って来ているよ。これまでにも、ず

いぶん、強い、すばやい者がいたからなあ。取れるものなら、このおとうさんだって、出かけていって、取って来たかもしれないよ。」

「でも、おとうさん、山の日なたの山いぬに聞いてみましょう。あのいぬは、りこう者だと、きつねがほめていましたよ。なにか、よいくふうがあるかもしれません。」

「なるほどな。それでは、いってみるがよい。」

おとうさんは、いいました。

少年は、はだかのままで、あなを出ました。つめたい風が、ひゅうひゅうと、冬の林をふいていました。少年は、風といっしょに、野原を走っていきました。

山の日のあたるところに、大きな岩がありました。岩には、ほらあながあって、そこに一ぴきの山いぬがすんでいました。

この山いぬは、かけることでは、だれにも、負けたことがありませんでした。目は金色に光っていました。二つの耳は、三角がたに立っていました。そして、しっぽは、左の方へきりきりとまいていました。首は太くて、四つ足が強いだけではありません。なかなかちえがありました。

少年は、山の日なたにやってきました。

「いぬさん、いるかい。」

「おう」。
と答える声がしました。
「おとうさんがね、寒い、寒いといっている。火の山の火を取って来たいよ。」
「火を取りに。」
山いぬはねていましたが、むっくりと、からだを起して、少年の顔を見ました。
いのちをかけても火を取ろうという、大きなねがいと、かたい決心とが、その目の色に出ていました。
「よろしい。わたしもおともしましょう。」
山いぬは、こころよく、ひきうけてくれました。そうして、

ちょっと、首をかしげていましたが、頭をあげていいました。
「しかし、それには、足のすばやい少年を、百人はそろえなくてはなりません。あなたのほかに、九十と九人。集まりましょうか。そのかずだけは、どうしても集めなくてはなりません。」
「集めるよ。走りまわって集めるよ。」
そう、少年は答えました。

(二)

二日三日かかって、九十九人の少年たちを集めると、その少年と山いぬは、いよいよ、火の山の火を取りに出かけまし

た。

野をこえ、山をこえながら、しばらくいくと、少年は、なかまのひとりをそこに立たせて、いいました。

「きみは、ここから、村まで走ってくれたまえ。だれかが、山の火を持って、ここまで走りつづけて来る。きみは、その火を待っていて、火をうけ取ったら、いっさんにかけだすのだ。」

「そうか、わかった。」

その少年をひとり残して、みんなは歩いていきました。

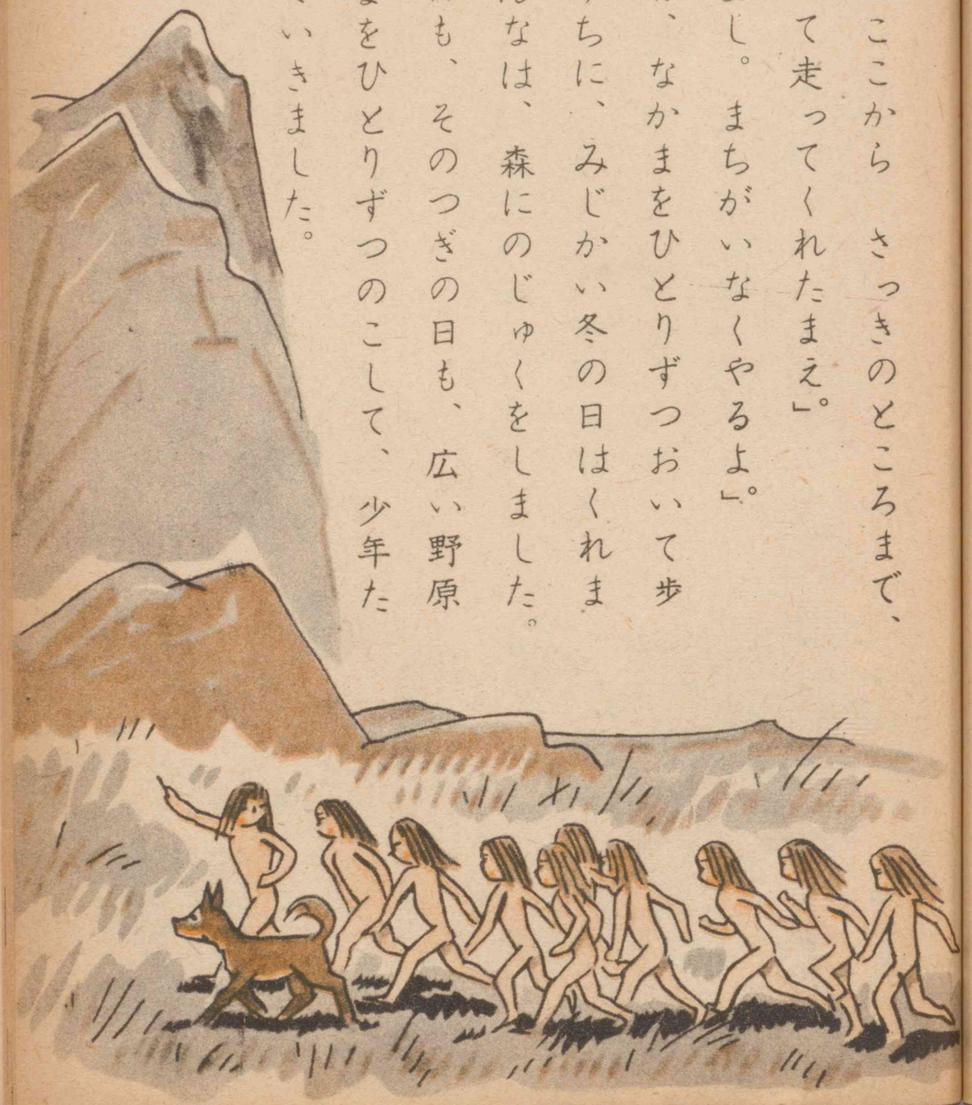
しばらくいくと、少年は、また、なかまのひとりをえらんで、そこに立たせて、同じことをいいました。

「きみは、ここから　さっきのところまで、火を持って走ってくれたまえ。」

「よし、よし。まちがいなくやるよ。」

こうして、なかまをひとりずつおいて歩いていくうちに、みじかい冬の日はくれました。みんなは、森にのじゅくをしました。

つぎの日も、そのつぎの日も、広い野原に、なかまをひとりずつのこして、少年たちは歩いていきました。

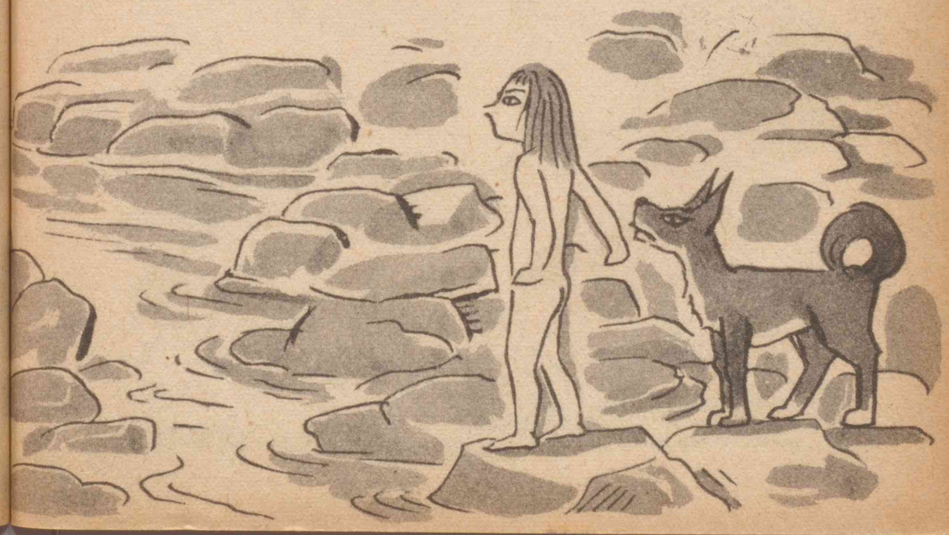


（三）

なん日か歩きつづけて、少年はいぬといっしょに、火の山の広いふもとに着きました。

山のふもとには、やけ石が、ごろごろところがっていました、野原の中をひとすじの川が流れていました。日がくれかかると、火の山の赤いけむりは川の水に赤々とかげをうつしました。

いぬはいいました。



「あの山のちょうじょうの、火の出るあなのまわりでは、火の精どもが、夜も、昼も、ほのおのおどりをおどっています。わたしが、そのそばへいって、おどりのわから、火の精をひとり、こっそりひき出して来ますから、あなたは、それまで、ここに待っていなさい。すぐ走れるように用意して。」

「よし、わかった。」

少年は、もう、その足をむずむずさせていいました。

（四）

山いぬは、ひとりで、火のあなの近くにやって来ました。ほのおのあかりにてらされて、いぬの目玉は、きらきらと光りましたが、だれひとり、それに気のつくものはありませんでした。火の精たちは、ほのおのおどりに、むちゅうになっていたからです。

まっかな顔をして、火の精たちはおどっていました。ある者は、むらさき色のほのおのシャツを着ていました。ある者は、だいだい色のじゅばんを、はだにつけていました。また、ある者は、まっさおなスカートをはいていました。

どの顔つきも、楽しくてたまらないように見えました。そうして、だれでも、ちらちらと、しじゅうからだをゆり動かして、いっときも休むことなく、おどっていました。

「いくらおどりがすきだといっても、おどれば、つかれてくるだろう。つかれてくれば、ねむくなるにちがいない。」

山いぬは、そう考えて、かれ

木のえだを口にくわえて、じっと待っていました。

ゆだんなく見ているうちに、あんのじょう、火の精たちはつかれてきました。まるいおどりのわのひとところが、ふらふらになってきました。わが、あぶなくも、ちぎれるばかりになりました。ふと、火の精のこどもがひとり、おどりのわからぬけ出して、赤いからだを横にしました。

ここだとばかり、山いぬは、首をのばして、はいよって、かれ木のえだをつき出して、こどものからだにひっかけました。ぐいとひっぱりこみました。

山いぬはかけだしました。

（五）

火の精のこどもは、はじめは、自分のからだが走っていくのに気がつきませんでした。あんまりおどって、頭のしんと、目の先とが、まだくるくると、まわっているので、目をそっと、とじていました。

けれども、風がいつもとちがって、はげしく顔にあたって来るのに気がついて、目をちょっとあけてみました。

あけてみて、びっくりしました。おそろしいけものが一ぴき、ちょうど目の先を、自分といっしょに、走っていました。目はらんらんと、大きく光りかがやいて、その目の中

に、ちらちらと、のびたりちぢんだりする、赤いからだが、小さくうつって見えました。

「おう、こわい。だれか助けて。助けて。助けて……。」

火の精のこどもは、さけびをあげました。さけびは、すぐに、山の上までひびきました。

「おや、なんだろう。」

「どうしたのだろう。」

そういって、火の精たちは、耳をすまして、目をむけました。すると、くらい山を

下へむかって、ちらちらとかけていく火が見えました。

「やっ、たいへんだ。」

「さらわれた。」

「それ、追いかけろ。」

「取りもどせ。」

火の精たちは、あわててかけだしました。

山をかけおりる火の精たちのかけ声は、はちのうなりにていました。山いぬは、その声を聞きつけました。けれども、おそれませんでした。かれ木のえだを口からはなしませんでした。火は、山風にふきあおられて、かけていくいぬのあば

らは、毛がこげて、においましたが、あつさをこらえて、ただまっすぐにかけました。

(六)

とうとう、いぬは少年のそば近くまでかけて来ました。そこまで来ると、いぬは、よろよろとしてたおれましたが、そのいぬをいたわるひまはありません。少年は、いぬの口から、火の精のこどもをさらうと、あたらしいかれ木のえだに、それをからめて、ひじょうな早さでかけだしました。

「それ、にがすな」

火の精たちは、少年のすがたを見ると、まっかになってもえたちました。その目は、青くきらきらと光っていました。そうして、てんでに、はをくいしばって、追いかけました。

火をうけついだ少年は、元気いっぱいに野原を走っていきました。ぬまのそばをすぎました。おかをこえると、森のはずれになりました。

そこまで来ると、つぎの走り手が、身がまえをして立っていました。こちらの方へ

手をのべて、からだをまげながら、足をむずむずさせていました。

少年は、そこまでかけて来ると、よろけて、ぱったり地面にたおれて、はあはあと、はげしくいきをはずませました。けれども、赤い火は、すぐにあたらしい別な小えだにうつされて、見る見るうちに、遠くはなれていきました。

火の精たちは、それを見て、はをかみならし、目をむき出して、追いかけましたが、しだいにつかれてきました。なかには、たおれて、草原にへたばる者もありました。そこだけ、草はやけて、黒いあとになりました。

もう、こうなると、火の精たちの追いつくのぞみはなくなってきました。

一方、こちらのわかい走り手は、つぎからつぎへとかわって、かけていきました。かれ木のえだの赤い火は、そのえだがもえてみじかくなるたびに、別なかれ木にうつされて、日がくれかかると、赤い花か星かのようにちらつきました。また昼は、黄色く、ちらちらともえながら、遠く、遠く、運ばれました。

こうして、ついに、赤い火は、少年と、いぬとの村に着き

ました。

村の人たちはよろこんで、火の精のこどものために、三方を石でかこんで、小さな家をこしらえました。そうして、中に　その子をいれて、たきぎをあたえ、炭をあたえて、そだてました。

その火が、どんなに人間のためになったか、それはだれにも、よくおわかりでしょう。

ことばの表

○あんまく……四十五
あかす……五十
あかり……五十一
あいこ……七十二
あんのじょう……八十六
あおる……八十九
あばら……八十九
あたえる……九十四
○いねかり……二十二
いなご……二十四
いちょう……三十一
いったん……三十五
いちどう……四十六
いっさんに……八十
いたわる……九十
○うんどうぼう……二十四
うら……二十九
○えき……三十
えいご……三十七
○オートさんりんしゃ……三十五
おとと……三十
おき……三十四
おんどり……五十
おさえる……六十七
おしとめる……六十七
おそろしい……八十七
かみきれ……十九
かぎり……二十二
かりる……二十五
ガソリン……三十三
がくたい……四十七
かしら……五十五
かみつく……五十六
かきなおし……七十二
かず……七十九
かがやく……八十七
からめる……九十
かみならす……九十二
○きつね……二十
きのこ……二十六
きょうそう……三十二
きせん……四十二
ぎゃくに……五十
ギター……七十七
きりきりと……十二
○くせ……三十六
クレーン……四十六
くらやみ……六十二
くらべる……八十二
くれかかる……三十一
○けんちょう……四十四
げんどう……五十二
けん……六十六
けとばす……五十九
けしごむ……七十八
けっしん……八十二
けむり……十八
○こがね……二十
こおろぎ……三十
こくてつてんしゃ……四十一
こんもり……四十二
こしかける……四十四
ごご……四十五
こうじょう……五十七
こがたな……五十七
こんぼう……八十三
こっそり……九十
こらえる……二十
○さかり……二十六
さいしょ……二十六
さお……四十六
さけぶ……五十七
さいばんかん……八十九
さらう……三十六
○しょうめん……三十六
しょくりょう……四十五
しゅつえん……五十九
しゃせい……八十四
じゅばん……八十七
しん……九十二
しだいに……十九
○ずるい……八
すずめおどし……十九
すごす……四十四
○スカート……八十四
○せつめい……四十一
せいしょう……四十七
せい……八十三
○たらたら……二十四
だっこく……二十五
だいだい……三十一
タンク……三十五
たすける……八十八
たきぎ……九十七
ちえ……九十七
ちょうじょう……八十三
ちぎれる……八十六
ちらつく……九十三
○つむる……十二
つめ……五十七
つける……八十四
○てもと……二十三
てつ……四十
テーブル……五十二
てした……五十五
てんちゅう……七十
○とくい……六
とろりと……十二
ドラムかん……三十四
とりあつかい……三十五
トン……三十八
としょしつ……四十八

どうわ……四十八
どろぼう……五十二
どろと……五十三
どなる……五十六
とんび……六十一
なみき……三十一
○にちようひん……三十六
にわとり……四十九
ぬま……九十一
○ねこ……四十九
ねがい……七十八
○のぎく……五十四
のみもの……五十七
のじゅく……八十一
のべる……九十二
のぞみ……九十三
○はじける……十八
はんぶん……二十一
はこぶ……三十二
はたす……三十五
はだし……三十八
はちみつ……四十四
はずれ……九十一
はっきりなし……三十二
○ひっかく……五十五
ひねる……六十三
ひょうし……七十一
ひきうける……七十八
ひじょうな……九十
○ふログラム……四十四
○ふなじょう……四十九
○わかい……九十三
○わるばしょう……四十四
○リヤカー……七十七
○らく……七十四
よこざる……四十九
○よこはま……八十六
○ゆだん……五十
○やとう……九十一
もえる……四十五
もちろん……二十七
○もみ……六十五
めくる……四十七
○めい……七十八
○むっくりと……六十六
むしゃぶりつく……九十一
みがまえ……二十八
みぞ……二十二
○みわたす……五十五
マッチ……四十二
○まるた……四十一
まい……八十三
ほのお……七十四
ほらあな……七十一
○ポケット……二十
ほうねんまつり……九十三
○へたばる……六十二
べつな……六十六
○へんさき……三十六
ふん……六十六

肉（4）　落（4）　鳴（6）　板（7）　今（9）　庭（10）　来（10）
教（11）　知（18）　歌（20）　重（23）　輪（25）　乗（26）　駅（30）
広（30）　旅（31）　美（31）　黄（31）　船（32）　運（34）　底（34）
旗（35）　品（36）　英（37）　語（37）　両（40）　読（42）　曜（44）
室（44）　午（44）　後（44）　演（45）　使（45）　工（45）　明（46）
待（46）　同（46）　楽（47）　隊（47）　童（48）　残（54）　炭（55）
起（56）　戸（57）　刀（57）　写（59）　絵（60）　首（63）　返（64）
取（74）　寒（75）　者（76）　負（77）　答（78）　決（78）　精（83）
昼（83）　玉（84）　横（86）　助（88）　追（89）　身（91）　別（92）

Copyright 1949, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国305

三年生の国語　中

Approved by Ministry of Education
(Date Jun. 30, 1949)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします

とべないあひる……後藤猶根氏
けしごむ……栗原一登氏
火の話……濱田廣介氏

編者
東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
〃 花田哲幸
〃 青木幹勇
〃 森下巖
〃 小島忠治

表紙とさしえ　田原輝夫　林義雄

印刷 昭和二十四年六月三十日
発行 昭和二十四年七月四日　定価　円

著作者　財団法人 教育図書研究会
発行者　会長務台理作　学校図書株式会社　代表者 川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者　図書印刷株式会社　代表者 川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所　学校図書株式会社　東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。

文庫
49
767
広島大学図書
0130449767